

研究セミナー最大活用法

池尾（和人）先生、池尾ゼミの皆さん、そして岡部ゼミの諸君、こんにちは。

恒例の池尾ゼミと岡部ゼミのインターセミナー（略称インゼミ）を、今年（二年）もまた開催できることを大変うれしく思います。特に今回は、日程の都合上、秋の授業も終わり冬休み入りの初日に実施せざるを得なかったにもかかわらず、このように合計四五名もの熱心な諸君の出席を得たことはうれしい限りです。そして、今年の幹事役を努めてくれた水田直樹君（池尾ゼミ）と山口陽平君（岡部ゼミ）のご苦勞を多としたい。

池尾教授との長い不思議なご縁

このインゼミに初めて参加される諸君も少なくないので、その背景、つまり池尾先生と私の関係を多少ここで述べておくのが適切かと思えます。

皆さんよくご存知のとおり、池尾先生は、日本における金融研究の分野で最も影響力のある学者であり、また私が最も尊敬する研究者の一人です。このような素晴らしいゼミとインターゼミが実施できるのを、私はとても光栄に思っています。同先生の鋭い洞察力は定評があり、先ほど、慶應大学における経済学部と総合政策学部の関係について説明されるのを聞いて、そのことを改めて痛感した次第です。

つまり、池尾先生によれば、慶應義塾という学校法人は一つの金融持株会社に例えることができるというわけです。その場合、その一つの子会社である「銀行子会社」が性格的には経済学部該当すると理解可能である一方、もう一つの子会社である「証券子会社」がそのリスクへの取組み姿勢からいって総合政策学部とみなしうる、という捉え方です。何と巧みな比喻ではありませんか。

ところで、池尾先生と私は二〇年近くも面識があり、この間、色々な場面でお教をいただき、あるいは共同で仕事をするといった機会に恵まれてきました。その最初は、私が日本銀行の金融研究所に在籍していたころであり、同先生は、岡山大学助教授に就任されたばかりの新進気鋭の研究者でした（その後、京都大学に移籍されました）。この時期には、日本銀行主催の各種セミナーなどに来ていただいたので、その折りにお会いしたり、あるいはお教を乞うことができました。それからずっと下って約七年前、同先生も私もまったく同じ時期（一九九四年四月）に慶應大学に奉職する身となり、今日に至っているわけです。私が日本銀行に在籍していた当時、まさかわれわれ二人が将来同じ大学で働くことになるうとは夢にも思いませんでした。運命とは不思議なものだと感じます。

特に今年は、色々な機会にお会いすることの多い年でした。例えば、七月には、オーストラリアのシドニーにおける日本経済研究国際会議（私がSFC着任前まで所長を務めていたマックオーリー大学日本経済研究所が主催）にはわれわれ二人とも参加し、議論する機会がありました。また、来年五月に慶應大学が主催校となっている日本金融学会では池尾先生がプログラム委員長をなさっており、この委員会のメンバーの一人である私は、池尾先生のリーダーシップの下で委員の方々と電子メールによる各種協議や交渉をこのところ極めて頻繁に行い、来年の準備を目下進めているといっ

た具合です。

インターセミナー参加で収穫を上げるには

さて、今日は、冬休みの第一日目。せっかくの休み期間を割いてこのインゼミに参加される以上、皆さんにとっては、何としても有意義な半日としてほしいと思います。もし、ここに参加していなければ、一日だけ早く郷里に帰れたかもしれないし、また今ごろはスキー場でスキーを楽しんでいられたかもしれない。つまり、今日のインゼミ参加は、諸君にとってそれだけの機会費用 (opportunity cost) を伴っているわけです。だからそれに見合う収穫を上げる必要がある。とすれば、そのためにはどうすればよいのか。

その点に関する私の提案は簡単です。つまり、研究報告に続く質疑応答のセッションでは、必ず一つ質問ないしコメントをする、ということをやめ自分に義務づけることです。そうした義務があれば、研究報告を聞くにしても、分析技術面における細部の理解、そして報告の全体像の把握がどうしても必要になるため、注意深く聞かざるを得ません。聞く姿勢自体が全く変わってくるのです。そして、こうした能動的な姿勢を維持することによって、大いに勉強ができるわけです。漫然と報告を聞くのでは、せっかくの時間を無駄にします。

これは、何も今日のインゼミに限ったことではなく、日常の授業やセミナーなどに共通する原則だ、と私は思います。実は、私は先週、ある国際的な研究会議 (アジア経済研究所が主催) に出席し、この方針をとることを心に決めて臨みました。その会議で報告された各種研究の内容は、私にとって必ずしも土地勘のある領域のものではありませんでしたが、こうした対応をすることを自分自身に課したおかげで活発に議論に参加することができ、参加したことがきわめて有意義となりました。また、SFCにおける研究会 (授業) でも、色々な報告の後に私が必ずコメントをするのは、こうした対応をしているからに他ならず (教師は当然そういう立場に立たされている)、またそれが私にとって大いなる勉強の機会にもなっています。

今日、報告が予定されている研究は、たまたま両ゼミの報告内容とも、どちらかといえば特定分野に関するもの (電気通信産業の改革)、あるいは専門的な分析方法を適用したもの (技術進歩の計量分析、グラビティモデルの計測等) が多いだけに、とりわけこのような気構えをもって臨むことが大切です。自分にとってあまりなじみのない領域のことだから質問もできない、というのは研究上の敗北主義というべきです。むしろ、なじみの薄い領域であればこそ、積極的に議論する気構えと勇気が必要になります。そうすれば、その見返りは十分にあるはずです。

今日のインゼミ終了後には、参加者全員の懇親会が予定されていますので、その席で上記の考え方の妥当性について諸君から意見を聞き、そしてまた議論することにしましょう。では、ここで司会者にバトンタッチしますので、早速、報告会を開始してください。

(慶應義塾大学経済学部池尾和人ゼミとのインターゼミ
における開会の辞、二〇〇一年一月二一日)